

在日インドネシア人ムスリムとモスク建設
Indonesian Muslims Living in Japan and Their Efforts to Build Mosques

野中葉 (慶應義塾大学)
NONAKA Yo (Keio University)

本発表では、在日インドネシア人たちによるモスク建設のうごきとモスクを拠点とするコミュニティやネットワーク形成に着目し、その背景と意義を考察する。

在日インドネシア人は、2020年12月現在66832人(法務省調べ)。人口の約9割をイスラーム教徒が占めるという割合をそのまま当てはめると、現在約6万人のインドネシア人ムスリムが、日本に暮らしていることになる。日本に暮らす全ムスリム人口が約20万人と言われる中、インドネシア人は国別で最大のムスリム集団であり、しかもこの数は、この10年で約3倍に増加した。

こうした急激な人口増加に伴って、彼らの宗教実践の拠点としてのモスクを自分たちで建築する動きが盛んである。東京に限っても、東京インドネシア共和国学校の敷地内に2015年に東京インドネシアモスクが開設し、これに刺激される形で、2017年には秋葉原ヌサンタラモスクが開設、また同じ年、歌舞伎町アル＝イフラスモスクも改築された。東京インドネシアモスクを管理運営するのは、留学生や比較的安定した職につく社会人を主なメンバーとする全国組織KMII(インドネシア・イスラーム教徒協会)であり、在京インドネシア大使館とのつながりも強い。一方、後者の2つのモスクを開設・改築し、運営するのはインドネシア最大のイスラーム社会団体NU(ナフダトゥル・ウラマー)に帰属意識を持つ人たちである。本国インドネシアでNUが基盤とするのがジャワの農村を中心する地方社会であり、来日する多くの技能実習生たちの出身地や社会階層と合致する。NUの日本支部は、2004年に組織化されたが、技能実習生の増加に伴い、ここ5年ほどの間で、その活動は急激に活発化している。

これらのモスクは、インドネシア人ムスリムが資金を出しあい、また、場合によっては実際の建築や改築工事にも携わることにより完成した。開設後は、彼らが日常的に集い、様々な宗教実践を行う場として機能し、コミュニティ内の結束を強める役割を担っている。一方で、複数のモスクの開設は、本国インドネシア社会の異なる社会階層や政治社会勢力がそれぞれにモスクを所有するようになったことを表わしている。